

復活されたイエスが弟子たちの間に顕現された際に、最初に言った言葉はシャロームでした。「あなたがたに平和があるように」と訳されている言葉です。このシャロームという言葉は便利な言葉で、日本語で「こんにちは」「おはようございます」「さようなら」の意味で、現代でもイスラエルでは普通に挨拶に用いられます。

シャロームという言葉は、19〜31節で3回も用いられています。弟子の心情的に見るならば、復活したイエスを見るだけで恐怖を感じてしまうため、イエスが平安な気持ちでいるように、という意味でシャロームという言葉を用いたとも考えることができます。

19節の冒頭の「その日」というのは、マグダラのマリアが復活の主イエスに出会った日のことです。それは週の初めの日であり、イエスが十字架にかけられてから3日目の日曜日のことでした。その日の夕方、弟子たちはイエスを十字架に追い込んだユダヤ人たちを恐れて、自分たちがいる家の戸に鍵をかけて誰も侵入してこないようにして自分たちを守っていました。

そこに復活されたイエスが現れて、弟子たちの真ん中に立って、シャロームと言われたのです。そして、ご自分が十字架にかけられたイエスであることを明確に表すために、釘を打ち込まれた手と槍で突かれたわき腹を見せたのです。それで、弟子たちは自分たちに現れてシャロームと言った人物がイエスであることを確信して、喜んだのでした。鍵をかけて誰も踏み込んでこられないようにしていた家の中にイエスが現れたことで、復活したイエスの体が地上での物理的な制約を受けない霊の体であったことを示しています。そこで、イエスは「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と言ってから、彼ら弟子たちに息を吹きかけられて「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」と言ったのです。

弟子たちはここで、復活したイエスによって聖霊を受けて、宣教命令を授けられるのです。ペンテコステの出来事によって、信仰者は教会を形成して、信仰を持続的に持続するように神に招かれていくのですが、この時、弟子たちに聖霊が与えられたことで、信仰者に内在する霊の働きが与えられて宣教活動を果たす基礎が整えられたのです。私たち信仰者も、イエスの弟子ですから、ここでの弟子たちに聖霊が与えられたように、既に聖霊を受けているのです。なぜなら、聖霊を受けていなければ、わたしたちが信仰を告白することができないからです。

ところが、イエスから聖霊を与えられたときに、弟子たちと一緒にいなかったディディモと呼ばれるトマスは他の弟子たちが復活したイエスを見たという証言を聞いても、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、私は決して信じない」（25節）と言って、イエスの復活を信じなかったのです。

けれども、このようなトマスの物事に対する反応は、わたしたちの日常生活の中にしづとく定着している考えです。批評家の若林英輔（えいすけ）さんが太宰治の代表作である「走れメロス」を解説した中で、面白いことを言っています。

主人公のメロスは、妹の結婚式の買物をするためにシラクスの市に行ってみると、そ

の町はかつての賑わいがなくなっていた。その原因は人間不信に陥ったために人々を残酷に殺している王様がいたからです。正義感の強い青年メロスは、その王様を暗殺しようと短剣を携えて城に侵入するのですが、すぐに捕まってしまう。さらに、王様に向かって「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ」と言い放つのでした。そうして、メロスは死刑が確定するのです。けれども、妹の結婚式をどうしても挙げてやりたいメロスは、友人のセリヌンティウスを身代わりに立てて3日間の猶予をもらうのです。人間不信の塊である王様は、メロスが親友を裏切って逃げるのを見るのも、面白いものだと考えて、これを承諾します。

王様はよくよく民衆の生活を見ていたのです。そうすると、日々裏切りが行われていることに気づいたのです。人をあまり簡単に信じるとひどい目に遭う。そういう民衆の実情に気づいた王は、情け深い統治を行うことが馬鹿らしくなって、民を残酷に扱うようになってしまったのでした。

メロスは一睡もせず走って家に帰り、妹の結婚式を挙げる事ができたのです。そして、最後の一日の明け方、目を覚ましたメロスはシラクスへとひた走ります。けれども、豪雨で増水した川の濁流を泳ぎ切り、襲ってきた山賊を追い払ったメロスだが、体力の限界を迎えて動けなくなってしまう。一度は諦めかけたメロスだったが、それでも自分を信じている親友もとへ自らを叱咤激励ながら、走り続ける。血を吐いてポロポロになりながらも日没直前に処刑台の前へ滑り込む。

友人は一度メロスを疑ったと告白し、メロスもまた一度だけ友を裏切りかけたことを白状し、2人は一度ずつ頬を殴り、そして熱い抱擁を交わすのでした。その姿を見た王さまはメロスを無罪して「どうかわしも仲間に入れてくれまいか」と話すこと
2

によって、信じるとは決して空虚な妄想ではなかったことに気づく野でした。

そして若林さんの結論は、このように人間が疑い惑いやすく、そして裏切りやすいものだという王様の人間理解の表層的な部分が最後に転換するところを捉えて、主人公はメロスではなくて、王様ではないかという仮説を提起しているのです

さて話を聖書に戻します。手の釘跡、わき腹の槍跡を実際に見なければ復活したイエスを信じないと公言したトマスに対して、イエスは「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手をのばし、わたしのわき腹に入れなさい」(27節)と言っています。興味深いことに、トマスが実際に指を釘跡に入れたり、わき腹に自分の手を入れたという描写はありません。これは、トマスが頑ななまでに実証的な人間はなかったことを示しています。そういう意味で、「走れメロス」に登場した王様のように、人間は嘘つきで裏切るのが当たり前だから、自分の統治では民衆を残忍に扱うようになった王様は違うわけです。そこまでの人間不信が行動にまで

及んでいる人物ではないのです。けれども、五十歩百歩という言葉があるように、自分の目で見て、実際に触れることができなければ信じないという態度は、私たちの日常生活に根強い考え方です。また、人間をあまり簡単に信じるとひどい目に遭うということも根強い考え方です。私たちは、トマスやメロス、そしてメロスの親友と同じように疑い惑う存在ですが、そのように疑い惑うことにはうです。ただ、トマスやメロスと同じく疑い惑うことを乗り越えて、イエスの復活を信じて、イエスが先駆けとなってくださった永遠の命を生きる希望を抱いて、終わりの日まで歩み通していきたい思います。